新撰筑波集 中

伊地知文庫
文庫20
6
2

伊地知氏蔵書

賀連歌

花咲て杉も幾そ度ちん

とも前よ　武部平高親主

富士に移来る千代のまろ

お茶も緑の杉るし

とも前とそ

花咲氏名女

文庫20
6
2

花もみな
うつろひぬと
ながめつゝ
こゝろもゆかぬ
ふる雨の
音をきくかな

三品親王

ありあけの
月もあるかの
ごとくにて
ほのぼのとする
山のはの雲

百五十二

君のまもりの
御製

春毎のまつこゝろを
知ひまある時々世き
ふりて民もまつふせるれう
神のさづけの中ら
国作也

権大納言実陰

月日とも松もむかしの光もて
あるも見の仮うきすや

宗祇法師

極くの家とおなじ苔ながら君代は
ぬる人山のかふく

参良政弘朝臣

百五十三

君代はちぬの国のかぎりなく
あまねきまでぬ人の為

法眼玄順

国あまたある軍の力まで
昔よめる家くの数

栄ゆく門は車の数えて
こゝも昔のたまもや

今の世も昔の何よこのうぐめや
君ぞとのあひよあり何

御製

見ん人の心の中も庵せよ
数よも世何のうきやみ名ん

後成恩寺入道三位大納言

百五十四

君よ諫のなきこそ世何
初るうぐにあへる秋路

従五位上兼行左衛門佐兼春宮大進藤原朝臣

君代ハ幾よきにあへる秋路
まそまあれそふあのと
風も治りて

前の従四位行

君の代の数そ演の方さこ山

夜の玉も朝夕ごとに
君が代を限りもきこえ
道くの心まぬあるへし
みちくの心まぬあるへし

百五十五

平貞家朝臣

菅原孝標女

静かなる御代のさへやそよくと
高すむ君を神もまもらん

宗物語

道もなきに達政の心
神山辺の月まるまと
来ぬる夜乃夫の政

流れくる亀尾の
春の水の白玉数えて

泳國卿君

哀傷連歌

烟のみ色よ消ゆる海辺

円六君

六人ともおもも悲しき
突き六年三月七日連句
手向草のこる日もなき
侍るよ

御製

もろ人の
はるの先こそ
久方の花
ちるまでのみやは
見るべかりける

宇治法師

梅の花心ざし
ふかくうえたてて
ちる人を花
ちるまでの
なげきをぞする

源持

百五十八

契りおきし
雪の明ぼの
ふりすてし
後も月
ながめこそすれ

宗般法師

雲ゐより
ほかに月
すみぬれば
ふもとの里も
ひかりそへつつ

前関白内大臣

秋ふかき
ふもとの里
いかばかり
月

無院宮道助法親王
住吉まうでしたりけるに
雨のいたうふりければ

ひのくれて歩をもはこぶ旅ころも
濡るるにまかせ雨ぞふるなる

権僧正兼義

ふるさとの雨の夜の
別れよりもまつ袖の色見えて

よき人の

亡き跡とへかし
栄のこる
宿の梅

宗政法師

いつもかはらぬ春の来の夕烟

ちはやぶる
神もきかなん
もろともに
契りおきてし
言清法師

ちはやぶる
神もきかなん
もろともに
契りおきてし
権大僧都心敎

越ぬるや果てぬ
人のうきをもれぬ出る海の寺
沈まるる老の秋まで

先うてひろく
極たる教法
貞柏師
百六十八

あり経ぬ心もれぬ今ぬん
なだれ初んことをかなしき
宗祇師

世中ハいかにうたてきとても
濁ぬ水の花ぞまさりて
筑波三信教ら

おもふまゝ
ゑん人の

ほの世ふ旅ふ通ふそも
　　李流法師
ふるまふふ人ふ
ふるまふふ山ふ
　　服部泰徳
ふ世の人ふ
袖ふ濡ふ旅ふ

まろふや亡ふ
　　宗祇法師
ふ尾ぬ冷ふ
ふふ花ふる

別ふ
ふふ
　　宗長法師
ふる朝夕
ふする夕ふの色
　　宗兰法師

今般のさまのんこころまる

戀連歌上

初春の神るこてまし　三品親王

天地と別るゝまでの恋の道
歌くらひよてもかしれ　権大僧都心敬

國ゝのよもかゝるまでのこゝろまし

おもきこころよ
夕霧よ雲ゐ遥けきものや
おもひつめ契のまゝに
後京極院御製
おもふまの名もうし
いつはりそのつれなかるらん
權僧正良應
百六十六

御製

思ふおの後ろめたく文果て
絶えまとだえがちなる
なびけとも君のたゆたふ心故
權大僧都心敬
君のため名をすてゝおもふ
うらみすてもすてぬ
宗祇法師
月まちて思ひ通ひの末ゆゑ

又やうやうこゝろもあるまゝに

ゆるしあるまじきよしなどもいひて

うちつけまどはすやまと男つる

法橋兼武

わすれ草つむてふ未もしら

泪のうらぬ夕もなれそめき

式部卿敦実親王

ゆるしなくよしなどもいひて

うちつけまどはすやまと男つる

法橋兼武

わすれ草つむてふ未もしら

泪のうらぬ夕もなれそめき

百六十八

ゆるしなくよしなどもいひて

うちつけまどはすやまと男つる

法橋重順

わすれ草つむてふ未もしら

泪のうらぬ夕もなれそめき

百六十八

笑そのこゝろ

さそ泪うらかれせぬ

智證法師

笑そのこゝろ

さそ泪うらかれせぬ

源持初

おもひきや心故
こやふる月夜
いとゞもれてんこまくみ
んのうやをとこまくみ

法印祐助

擬天祝詞心故
こやふる月夜
ふる人よみつゝそん

法印祐助

宗伊法師

妹ることもけ
なれそふゆるきの袖

宗砌法師

おもひ出もなき人おもほゆ
うたゝ寝の方もあ

宗良親王

宵とをへぬ斗うき中よ

包よりくんやこひとえん

尋ゆくくんの杉の木のもつ

たつぬるや君のお宿と

なつかしき何と服ともせん

百七十一

宗般法師

法服寄

高澄法師

なつくさふかきあはちはなきく

服なるくんや忘れて行ん

撰集抄恋歌

おもひおれなるものゆゑまと

なき夜うくんを行ん

高良法師

前関白近衛

[illegible]のうちも教うて
[illegible]ひけすよ一つ[illegible]る信

惟宗武弘

[illegible]もも祝ふよの時[illegible]る
[illegible]ふかりおも祝そう

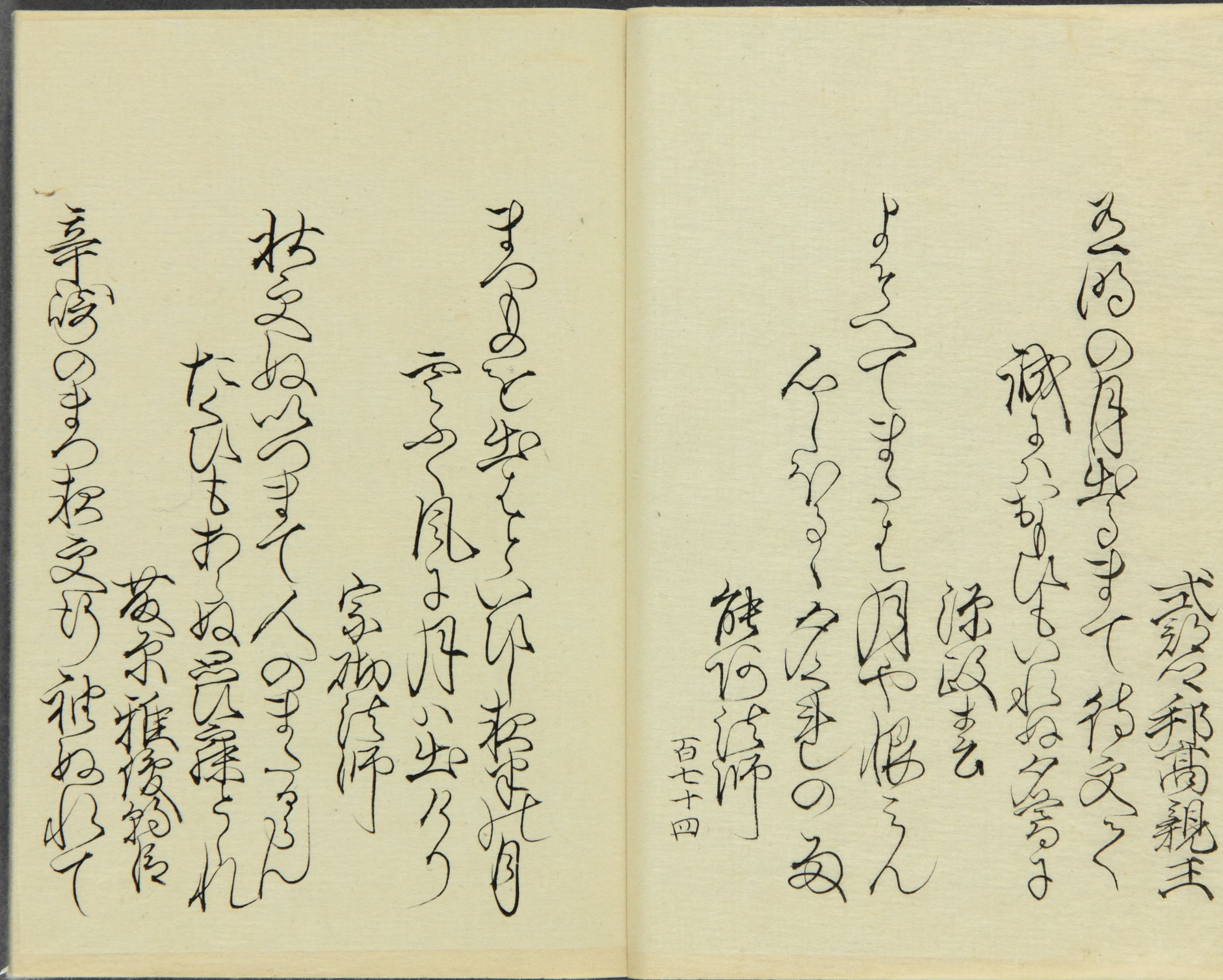
従二位公敬卿

百七十三

[illegible]れの心のそのり月
[illegible]室二貴音家て折の
[illegible]も交る人の玉つさ

無院通旅衣

[illegible]る月とくく
[illegible]おうまのとうん



式部卿親王

秋ふかみ　おもひもいれぬ夕ぐれも
よそにてまつは　かなしかりけり

深養父

ふるさとも　月や恨めん
かげもるまでの　夕ぐれのそら

能因法師

百七十四

まつもとを　出でてもとめし　秋月
こゝろぞ風よ　月に出でくる

宗砌法師

秋ごとに　人のまつらん
たびもおぬ三笠の森も　れ

菅原雅規朝臣

幸ひのまつわ　文も祈ぬれて

秀そそ訓ぬ人の偽
平まさよう
つれなやその松の風
後の森いまも定めよ
そも近く松の
撰実伝忘歌
まなやく病よ神文く
人と変ましき

大応寺

ふたのまろおの床よ通ふん
ふ弱きふりの為のまま
服泰徳
松もおやそその根よそおん
人の問とや人々ん
太禅法師

井垣と神ノ倒るる

朱欒のみひく迷ひわらうん

おもふ人ゐぬ人寂しめて

きえの世よりわかれつるおもん

きえるまで向ふ月影

百十一

冬後重信

なまさうの人形ぬるる杜のあさ

文月雲掌宛書状拝読

仲ひなき連句よ

このへもろもろ別路

御製

こまやかに文あやまちて

なふんをきつれゐる

よみ人しらず

このほの世ますや神なおよ
文りおもの心さ

後撰集恋歌

権大僧都心敬

夜もすがら月と花のあよりて
まち出ぬ暁こそあれ

百八十二

稀よのう待ふ秋の短冊

平章揀

婦き

素純法師

おもふる秋来ものの小萩

心の引てなろせり

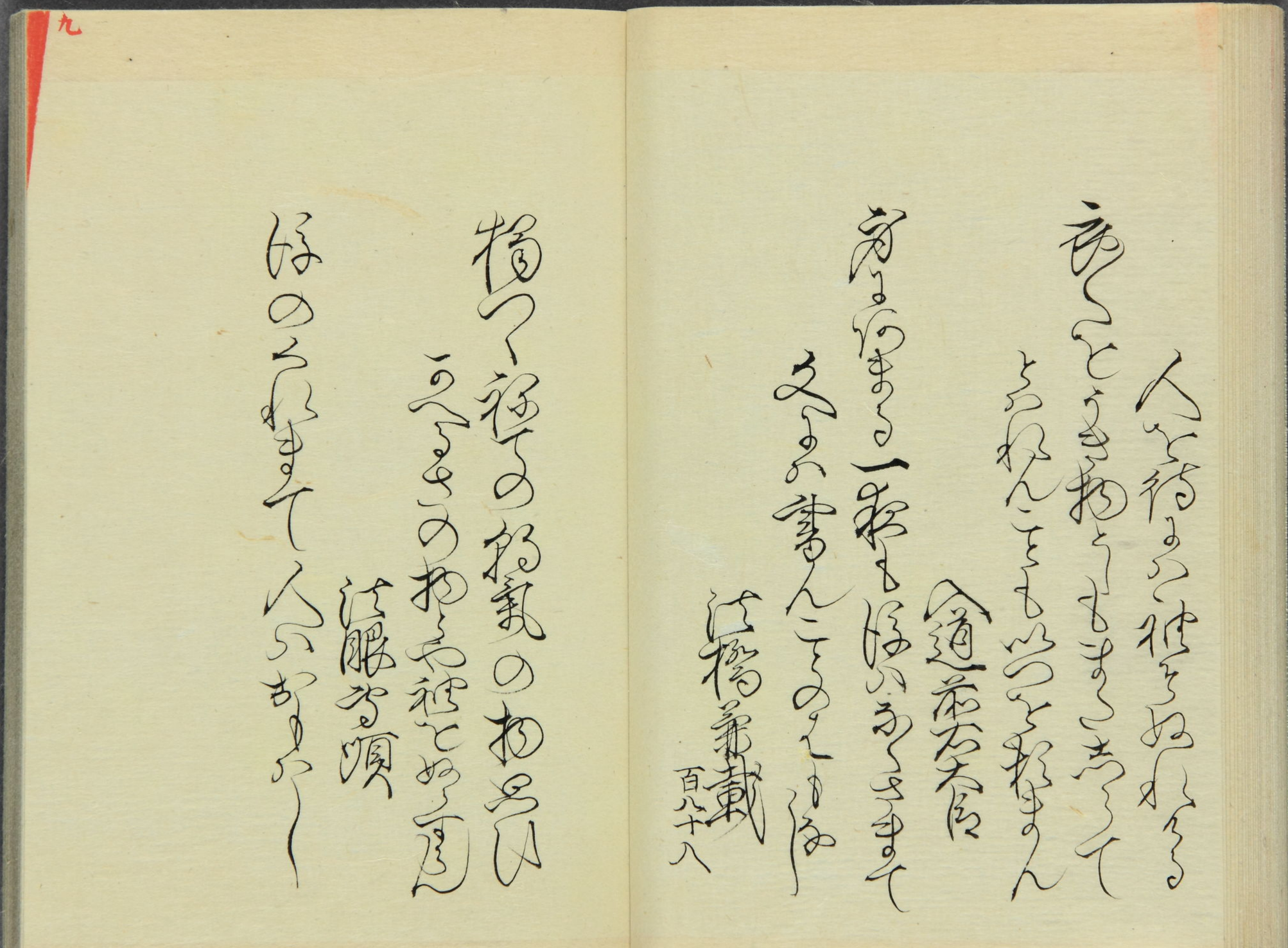
菱亦正存

道元法師

捨てゝ去ぬる
よしや今さら
ま袖

權大僧都日与

賀茂法師



意連歌中

おもへ人に似る木く

権大僧都心敬

たゝねこそ

おもふ人にも似る木く

わすれぬ夢のはるのよの

法眼元数

うつゝ迄

百八十九

とけて初雪ふるよとも
ゆきてふ人のこころもしらなくに
　　家長法師

あぬと人のこころもしらなくに
ゆきふるさとを消なくに

深き夜の
百九十

又逢うまでも定めなの命や
恨の末や忘れいのち

　　俊頼朝臣

高砂の峯の松とも人をいはじ
住の江の岸の姫松いくよへぬらん

　　源重経朝臣

あの世までふかき石根川

[illegible]

[illegible]

[illegible]

同じ人よりの口すさみ

恋捨て行

きえぬよりおもひすてこそなかるらめ
有も村雨ぬぐ袖もなし

かもめる島ひとりおもひをかたらんに
今こんまでもそなたなし

百九十四

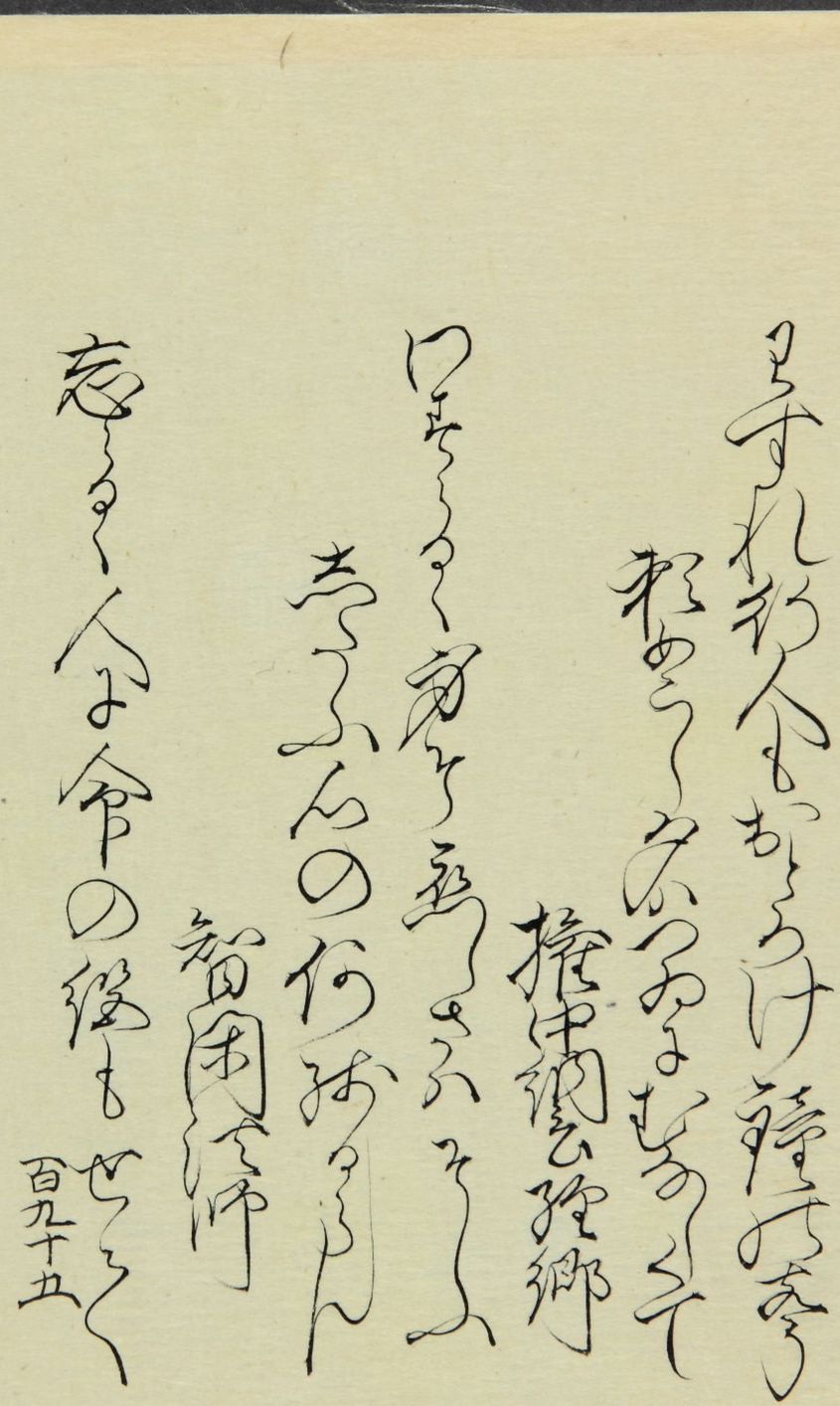
家祝ひ

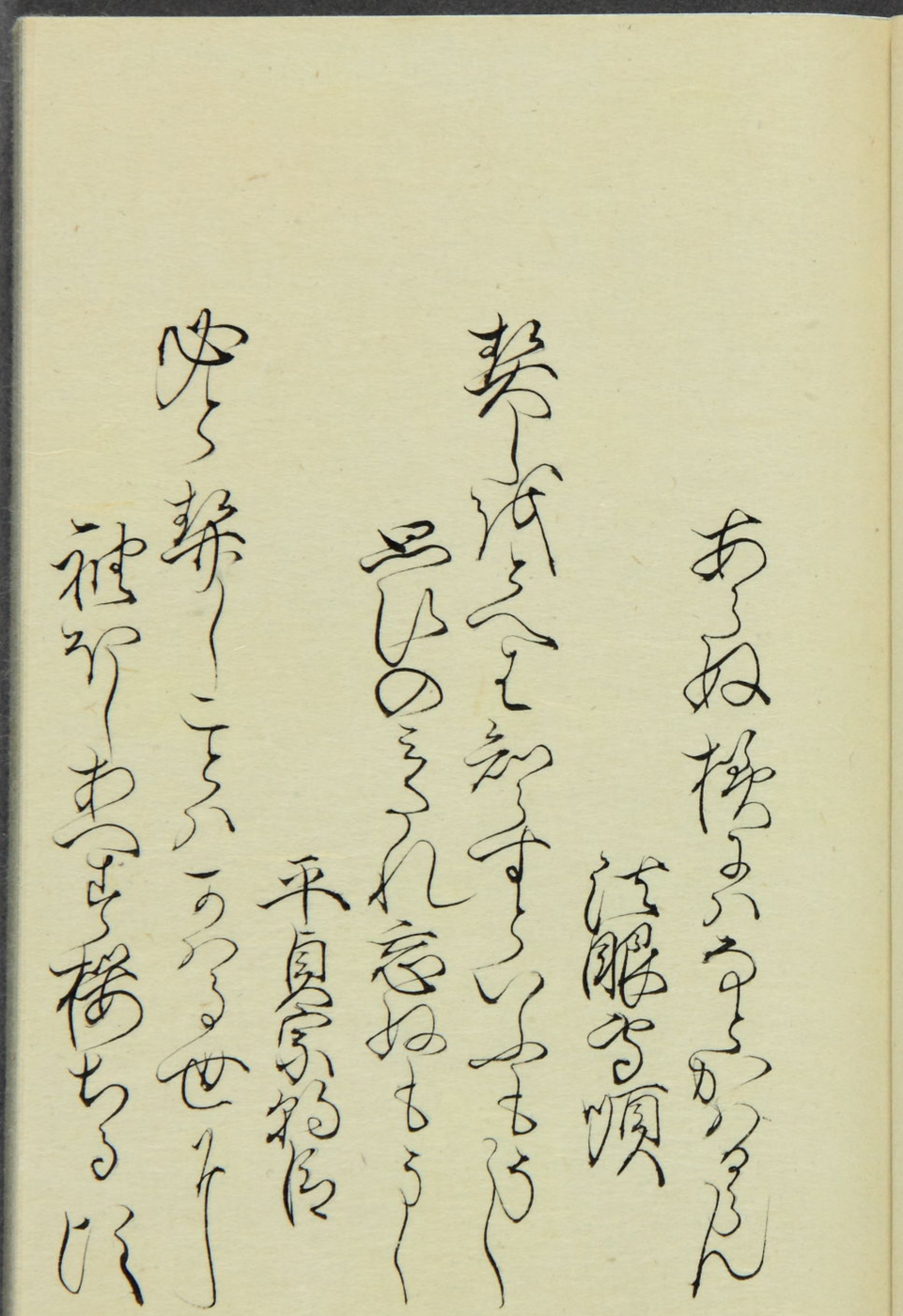
忘れの人のあとや末の月
軒のたまこの月夜の空

旅宿後朝

とへかしなおもひもさだめぬ夢ばかり
名ごりおしさの袖の露

御前





花よこそ契
さくおやんたなのもん
権大僧都心敬

風のまに
る庭のこの花と称して
ゑめてんの通へう

三条前太政大臣

百九十六

常行院

人のうらひく
たなのもん
権大僧都心敬

花よこそ契
さくおやんたなのもん
権大僧都心敬

風のまに
る庭のこの花と称して
ゑめてんの通へう

三条前太政大臣

百九十六

常行院

ゑてふきのふの人をうつろふ
えゆかぬ夢のうつつをなほ
権大納言宗嗣

いつの月に人のこんのこのもとに
ひとりながめんあはれ一年
法橋兼載

ふるやまのみねの松風ふきわけて
ふもとを永き別まで

涸てあるの神よ恋るの
家物語

うき人のにもれてみ水根すて
せめてふかきの淵をこそ
二道のうみも絶ぬこそきよ
こちのそよふる嬉さ
百九十七

撰天修功心歌

雅面さ洗ふ
つゆも
たぬ涸とれ
冬浅き沼

ふるつゝ
絶ぬ
三木親王

おもふともや昔にうつらん
おもはぬも又も同き事ゆゑ

恨ふ人の命の限りあるこそあはれすゑ長き恨となりけれ

弁乳母

後鳥羽院
寺の道命阿闍梨
百九十八

くる人なしの宿ふりゆく

江帥匡房

住吉の浜松やちよをへぬらん
たれそもとふるのかりの子

権大僧都心敬

うつゝよも夢よも人やあはれなん
いつこまでとふ人のこゝろぬそうき

むしひまて受ふる神て

人とゝてて事もうゝめ
受ふへうとふまかるゝん

地もかゝてふ
本ふつてふ

藤原敦通

源威卿

二首

さゝなる涙の神よ祈るん
おもひたつてほきのゝ

宗勲法師

涙のゝ神よわれと気もち
契ゝ拘よ事てゝるゝき

よゝ人ゝ

偽のある世を祝ふん
うらうらに照れる春日に
偽のある世をも祝ふ
従二位家持
涙のひまもなくつくゆゑよ
道祖王
道祖王
まそほ貝
言の
言へ

ほろ死神を親と
　　よにふるころは
松風も涙もぬけてかなしき
　　冬良俊弘
ふるさとのみはてをまつ
　　庄橋乗載
　　三首

附人のうるに伴ふ
　　宗仲法師
こすのはる　附
　　冬良俊弘
面影のうれを向きて先ぶ

まろねとや
人の袖ふる
祝ぬるよ
飛ぬ
よろづ
宗祇法師
宗伊法師
三首

月よ
人よふん
鶯春
ひとり
文明十年
寿安法師

初よりも古き頃の
英明を雅親
ながゆきもながゆきなりや
唐土の李白よりうたなまめ
かなふうん人のうる松の戸
三百六

今なてしこも引われ

さすらひもたぬ玉の緒

さまれも恋よふんひつことせもや

前大納言忠春

文明十年百首院々奉納

二百九

大空のかぎりそ百韻恋のよ

かくそとほて人のへつく

藝阿法師

恋さても限りよりぬ玉の緒

なひくもうろひやもん

宗祇法師

わすよ世ふ定めなく人の

参議基綱

御判

太政大臣

御判

今の命おもふともせよ
いく分うく生れこん
あすしも命ふ知ぬ
世のならひ
今日の命をとうとみもせよ

宗祇法師

法眼快隆

雑歌を詠るとて
源経房

命よ恋の果をみたのまき
なからへよのつねをみるにも

よき人

惜しとおもふ命も昔まく
命ふ限りあるぬき中

ほの世のまよひとなる歟

後鳥羽院御歌

袖ぬるる秋よ二たびとおもふ歟

従二位為家

後の世をよそに思ふはおろかなり

権大納言公雄

あるやなしの人の心を

前大僧正慈円

つたへおきてもたのもしきかな

恵慶法師

人の為ならばこそ
輪廻通花園院
人のためにもよき方につかれぬく
権中納言宣親
今かくこそあらめとも
おもふ間に

宗祇師

別もまつも祝ひあひ

深き契を

人よりも先に逢ひそめて

世とともにうれしき昔ばなしの会

前関白近衛

おもひこめさんと祈ることのはの

とどまるかぎりつたはれかし

今宵哉ちぎりし人よ秋の月

秋寒使後量

なかめやもせむ老のもろもろ

宗長法師

なかめやもせむと小萩の初ゑまで

法印如椿

袖ぬるる雨を涙と思ふ哉

涙斗はこぼれやらぬる

夜ふけ元親

夜のうちもうんなふも音へせて

六郎の世のうみやまの

法印定盛

夢とのみてはなも逢ぬもやいもせん

なみとい…

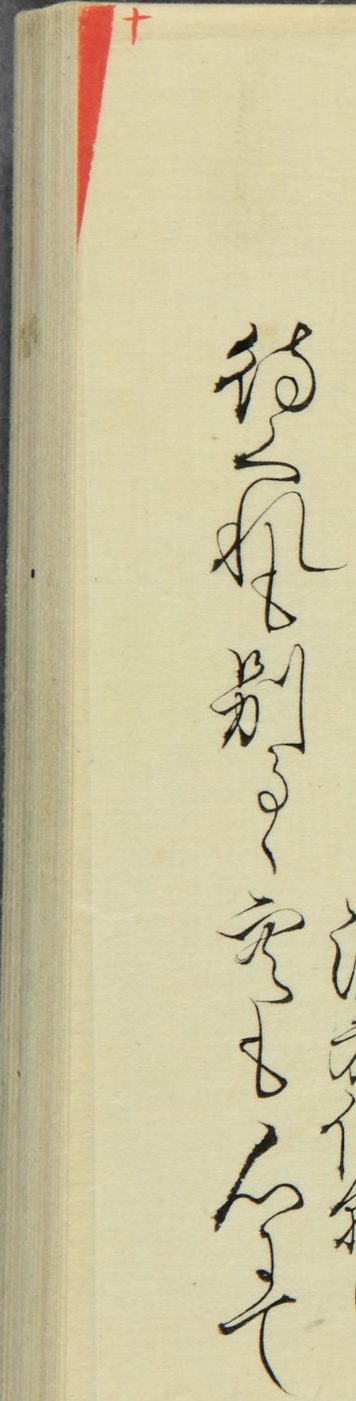
及ぶのさ…

…

「…

…

…



寂連歌下

わすてこそ今すこし見む花もみな
人のこころもうつろひぬらん

前権僧正

今こんの名をたつる花も風もまて
いくよ匂ひを春にかすまん

二百十八

前参議教長

風まつ花もいかなる人なれや
待るる中の秋もうき

前権僧正

人のこころ花なさそひそ
人やとん

二通のふみをもらひて

燈火に花ことよせて

人の手の文見てゐるよの秋

法橋重載

人の手の文見てゐるよの秋

法橋重載

扇のうらもかき尽したる

名の高き風の形見や

わの中よまで秋ぬれつゝや

法橋重載

わの中よまで秋ぬれつゝや

宗勲法師

牡鹿

七夕のあかぬ別れよ秋の雲

秋信寄月

おもふ萬ことよりたえて秋の月

雁

かへる雁ふもとの里もあきの色

惟大徐州公敬

旅ごろも幾月もつゝくよ

宮通親光

神よ今宵のこころを
鳥鳴く東雲の月よ神ぬ
なしてまるも女ごころよ

前左兵衛督

権大納言忠教

晩の雲さそなおの神ぬ
ひのうや人の向ぬとる

御製

よ末守る夕の神よ神ぬ
契重ねる人ぬ神

左近中将公蓮

鳥なく方のうぐひすの夕よく

うち死をもやすまとも志ま

人のうきもまつ心教
ものもまつ雨かな
ありうき人の
こうそともまれまれもお

宗伊法師

二百六三

深実法

人つめてとまりまりや雨のん
深きおもひをおもふ
杉もとやひとり雨よ

夜不為績

かるもとに祖と祖まで
冬深草綱

枕のうきひろ初
草葉のかつ斗のあひ

あとうもむのおもよのみそうね

長禄三年四月宗長
同人おもかけ草ニ入
二百廿四

すミあらすむくらの宿のひとりねに

無慮通夜発句

あかすよハ

明る松ハとをおもひそへて

宗祇法師

周よ迄

雪ハ山のおもも

肖柏法師

消うせぬ雪ハ春ハく春ハ

たつ人なきあやめふく

雪まろび　宗物語師
　　飲かはす酒の中乃よる炭
　　　　帯刀左衛門雅康
雪ふりてまくらの松をも明さん
　　権大納言親長

村の神まつりえよりおもひ来

藤本氏

月のてらすは何をよろこぶ

神まつりぬる後人

帝詞 行事 同

宗教と芸術

こよひしも月よりすしん

行きて文ある

二百廿六

前左衛門実

久々の波もうれしき月の浦

われ沈むひろの松ぬるさ

今宵月たゞ

逢ふ夜は雲なかれ

月よはぬしん

神まつる中の松よ

冬波墨雪

ちきうふねの月

こよひはくもりてみえすもろともにたへまし

せめて月ばかりなりとも

大深令和尚閉関之夜

人のみる百夏の連句よ

天徳三年二月廿日の夜主自社

なきものとおもふ心のうちはかは

二百六十七

人のみる百夏の連句よ

御製

いつまでもうき月ばかりなかめまし向ふ

人のなきよはつらくて

愛宗禅教智

あふさかの関もる身もなかりせは

いつこもここもうき世の中

安良波智教智

月よそ西山のかたむひ
いるまの雨のいとあはん

雨よこひ月よ
花やおもうらぬよまほし

家ふん神もの
ふるのまと向ん

宗般法師

宗祇法師

二百六十八

春も去ります花見ふく
ふる雨ぬ人と月
ふるのまよ

前宗悟補

他の上人

月ふる花の
神ふる春ふる

おもふ神の月やいつくん

琴ぢ人向て明すおよ

家ごとに月ある月ぶうごく

僧の法師

市井法師

二百廿九

ほるなる月や人の向つむ

われる中ふけゆく

あまる月見よ猶ねく

僧上ねこんぬ

権大納言法

ふたなき月の交まおよ

うまのもなるや仏

後崇光院御製

神のよの月とし別の明るおよ
起て打院ぞの色くま

神祇伯忠富

月や為の面影のそそ
あまもつつまおの院

二百三十

いつこたれ
洞数を

後花園院御製

為仁の仏

三条親王

為尊親王道貞

雲を消えみうの　仰ぐ
いつ雨ふりやく　それの
雲をも消の雨よこそ
高ぬるのおすむ
宗忠法師
三百三十二

閑吟

行雲も消よこのくる夕まくま
おもしろき雨の来
権大僧都心敬

ちまうまき消日のこふおまて
ふるさとたおれる有明
智蓮法師

かせふかの雲をちまうよく

[illegible]

[illegible]の神よりこの山をまつらんよ

後京極殿

[illegible]れてくる峰のこ

[illegible]

意死ん[illegible]

[illegible]

[illegible]

夏の雨のなごりもあらん

源宰相

なつ深よるの雨も出よ須川

よる野川ふかくもる波と神さびて

道元法師

なつ深よるの雨も出よ須川
よる野川ふかくもる波と神さびて

宗勢法師

無限のたくひまでぬらす雨の脚

風雅和歌集巻第五

法眼頼春

月よりも先ぬれ衣着てやまたん

後花園院御製

なごそそて地同すや今ゆふ
春の海ひねもすのたりのたりかな
蕪村
人うらのあまりも波もかきくもり
権大僧都心敬
ひとりねの夜半の寒さも涙かな
宗祇師
ひとり寝のよすも涙ぞうらめしき
三百三十七

文明十年三月廿日無尽会発句
家そよ作者
涙うきおうすよるく
花中納言雅康
海も津も昔ふたなる御製

後花園院御製

尾花ゆゑあはれをかけよ秋の野の
　人待つ宿の笠萄采

式部卿貞親王

契ふかき宿の笠萄采
　尾花ゆゑあはれをかけよ秋の野の

前大納言為家

尾花ゆゑあはれをかけよ秋の野の
　人待つ宿の笠萄采

前右大臣宗尹

尾花ゆゑあはれをかけよ秋の野の
　人待つ宿の笠萄采

大中臣時親

尾花ゆゑあはれをかけよ秋の野の
　人待つ宿の笠萄采

冬花基綱

花ちるまでの恋くもふ行ねたく

いつの恋くちすてゝ行ん朝もやき

久明王御製

雪ふかき山路の月のおもかけを

おもひやるこそ行ん朝もやき

為兼卿

雪ふかき山路の月の影さえて

無諸教園

同人もやゝ逢そふ松ふくあらし

おとつれぬうき人やたのまん

宗祇法師

学問のすき間もうき中は

人をも神も波もかくる

契ふかき
身こそあらなん
草の戸に
風へやいとん
式部

雪ふりつもる
小菊の
姫をもち
花の
三条殿

夜ふかき
夢の
栄明公
あさ衣
ひろ袖
三条殿

悲路を一月ぞ思ふ

引くおのの小車おそし

夏草の

ゆふつ方なるふんころがし

道元法師

罰放連歌上

来ぬ夜ふく秋の月よ花をみて

ゆく別をおもふころかな

前関白近衛

秋の夜の花よ柳よおもしろし

神慶

杉苔なる老のり未

的白き沓ぬぎもそく旅うて

ふる日こそたもとかわるる

旅行留守

まつ別ぬ旅のひまいうほうり

待身哉

二百四十五

何もおもしろき旅よ旅ゝて
桔梗のこゝろよおもふべし

むさしの高き旅路の雲の奥
山も空なる秋の月よ

かり寝する旅のこゝろの
よもすがら

秋の月よ旅ゝて
二百四十六

哀なる雨と風とや
旅の頃

おもふ人のもたらきて
今も旅またぬ日なき

添春仲秋日

おもふ人と逢ふくまも山秋くる

寛政十年内理そ行き

山路入雪

宗砌法師

雪深き道のへるをたどりつつ
こえてぞ人の山路入りぬる

雪深き道もたどらぬ垣根とて
あとなきやどぞ人はよりける

源盛卿

二百四十八

本のもとに相坂の
絶えぐの雪を契の末よりて

源実氏

中納言家良

あの山のも

初元まふでやぱん種のう

名所抽き　其の法師

日よ源氏抽きまる山

早蕨法師

日ぬまでにあるきう歌木

うぐれつく人を恋つき

深友興

踏迷ふ雪向き里のあ

虫くよ恋人のある迷ふん

宗雅法師

杉の戸閉てくるき山乙

物もなひよやうて

惟宗武弘

あふの山のみねの松のみどり
あらはれわたすみねの松のよるく

きえ残するまの山のかすみより
かすかにくもるおくの山のみね

宗伊法師

宗般法師

二百五十一

菅の根をみねの月にあらはして
ふるさとさむく月をきく山

肖柏法師

雲井なるあまの浮橋よそながめて
船のよるべの津や教ふらん

後京極摂政

生前のこの世をよそに浦なれて
なみだの松にかかる浦波

家僧ぬ祇清きよの祇の宿

あるが中とも　権大納言典通

越てゐまねぬ小夜の中山

二百五十二

道元法師

父おもふ心さよの中山

はゝおもふ心の闇もさ父の闇也

かゝれとて　信濃

袴きよのみもきこそもる愛現

智證法師

宇津の山へよも今日こえはてじ
　　現をも夢の中
　　法印幸清

都出でていくへもお旅のうつの山
　　いつるくまてかなそてん
　　権大僧都心敬

おもきをすてのみあり野の旅の苔

雪の朝

　　法印幸清

唐土の鹿もや恋ん冬ながら
　　よしのゝ雪をみるにつけても

　　法眼宗牧

波の介も雪の朝はうたひけり
　　よふきをかりてきる衣かな

　　法眼宗牧

ふるさとの旅乃り未
権大僧都心敬
宿出とゝもに
心ゆく
一本よも方の春ぬへき旅ゆえ
ゆくとゝ神のうら
高室法師

旅ゆするこのゆふまゝまてゝ
妹恋ゝ
笠ゆや方ゝとゝ
ゆ濃ゆ
深尚純
丹治氏秀
ゆ見長濱

旅人のつまる月よ袖ぬるく
まもつるぬ古里の道
法服寺
笠松をのなる庭月ふかて
旅ゆくうきこともあぬるの宿を
宗良親王
二百五十六

雲井をもふるぬ神山の杉
小笹よかるるのへの雪
大江定房
小松村雨こえて出つる
このうえ行へ空のそら

堂ぶ

草枕まくらの一夜ひとよ旅の空たびのそら

徳一位教忠

草枕旅の泪やおすすん

袂の雪重ねつる

二百五十八

月のまつふかみ
暗夜の心

いつくまも今宵の月よとまちえてや
雨雲さそふ秋の夜嵐

旅ねやこまくらにまつ秋の月

権中納言俊量

三条親王

行遠月

邦諒卿

月よこそ宵のうき雲はらふよ
夜ふかき野の秋風

旅人の涙の月よ弱あて
神ひもあへぬ神のう

月と宿をかりて
都のつとに松ようれて
月ゆきや竹のあなたのかりまくら
こうてこそやまず十九々
賀温法師
法服をかり
二百五十一

須弥や狭月おの旅ます
蘭よ三よる木のこ寺
宗良親王
月影や松の旅人中そ浦
ひとり三よ陸のそう
宗砌法師
うき雲とも都よ遠れ松の月

御製

三十一首

一本のやまも同一吉里
思ふことをもいそ長き
　　源尚純

限りなき吉里よりて出る吉里よ
いやすゑ遠く栄ゆべき哉
　　従四位下行侍従兼侍医
　　雄山法師

新人歩一日数百里まで

かつやまで受ける

秋の林古くなりぬる秋ごとの
秋のこの月を仰ぐ

宗砌法師

古さよ消つべくもあらぬかな
今力さへ秋の月さえ秋人

二百六十四

古さよの月一村雨の
うつりもはてぬ宿の松風

宗祇法師

都よりこよひぞ来ぬる
よろ秋乃
月もとそれ

玄宝法師

武蔵野よかりねの夢小萩

おもまの月いつく

大伴宿

君をおもこのかつらのやま

堂ふねかぜ波のる

うつろふをみてもをそもろん

武之郡之親王

すまうら波たちやまま

二百六十五

宗祇法師

こひわたれ都る

ゆふ立ふる人おもふら

法橋兼載

君のまそてひるまもなふ鳥

宗長法師

旅り人のこゝろもしらで雨うけ

体うつくしく旅人

愛の山ぶし

武つ貞常盤

二百六十六

道奏

旅をもみちのおくまで
こえてきてあはれをさそふ
雪の夜の月

なつかしき姉のうへ
なつかしき妹のうへ
雪の夜の月

橘実載

遠きそらまたきの梅やかをるらん
都をのこすおりのまま

平章棟

花ももなくさめうる比なれのみ
月果てもなくもいる別れん

権大僧都心敬

ゆくもる山桜戸の旅、杉
枯野のよも消えなる
源安奥
旅衣すこし寒くて年ふりて
有明神よりほか山ぞなき
よしみ
二百二十八

雪ふかく人を通る杉もせ
家経卿
月前露
こえぬまの浦も弱のきりぐす
家長卿
雪ふかし弱の足門のも
おくふかき人の庵

家物語

松ふく風の泊り毎
なほ共にもる夢のうち

吾妻光傳

吾浦ゆふくるも志ばしまつかねて
中そらや月の出てとまる

吾良浜宿

こゝろおのづから森ふかき泊かな

常徳院殿大夫君

松ふかぬ方と泊りまして
新も暦の明方の月

道華大君

文ちん海よりくる秋のよ
松ふく袖のつゆとこぼる

久神山路の雪よみて

月のうつるもの寒や 昭

行く年やこぬ人待つ波のよ

おぼつかの月よきかな

法眼泰孝

宗切法師

山もせよ行く年波の言葉哉

行く年をこぬ人待つ波の音

枯尾花薄雪出る夜半哉

月ありて行く年惜む旅人

法眼泰也

宗物法師

きさらぎのそのよのそのそのよのそのそ

雪ふる野路の笠の杉のそら　　宗長法師

旅人のみち行きつる春手鴻　　法政卿為広

春集共詞と云て百首也

江服寺の
月みてもおのが
もろこしの山のそともな
宗物法師
二百七十六

山ふかみ唐寺の稲荷
かすも果ぬこのもの
瀧もる秋のあみこまもちひ
ゆくらんとつくおんく
智證法師
神つ秋空よ唐橋の月
夢うつれる山道の

やつとても
宗旨法師
獨旅する
旅の神
契てもこゝろ
權中納言隆房
又なじみ
旅の古さよ
さし出る
旅衣
法橋重誉
二百七十七

このくてもこゝろ
又逢よなれし宿もあり
權大僧都心敬
かるかやも同
逢ふ宿ふ旅の道
智蘊法師
おもひまゝを都よ伴ひて